

河川調査から見えてきたもの

特定非営利活動法人 野生生物を調査研究する会 黒田明彦

「前来たときと少し様子が違うな。」
 「ササが全くないじゃない。」
 「温暖化の影響か、それとも鹿などが増えたということかな。」

京都大学の演習林「芦生の森」の調査での会話です。京都北部の低山地帯に太古のにおいがする自然林が残っている森です。由良川の源流です。



図1 由良川源流部 芦生の様子

2005年から2年間調査した由良川は京都府を流れる河川で、南丹市美山の山間部を流れ、高屋川、上林川等を合わせ、綾部から福知山盆地を貫流。福知山では土師川を合わせ、ここより北に流れを変え、舞鶴市及び宮津市において日本海に注ぎます。川の周辺には広く連続する河畔林が残りサケも遡上する、自然堤防が残っているのは全国でも数少ない河川の一つになっています。



図2 由良川カヌー調査

野生生物を調査研究する会は1992年（平成4年）に発足しました。1999年（平成11年）に法人格を取得し、「特定非営利活動法人 野生生物を調査研究する会」として活動しています。



図3 武庫川源流部田のなかから始まる武庫川

活動は、河川流域の調査活動、自然観察会、里山保全活動、国際協力、出版活動などを通して環境啓発活動を行っています。会員数30名で7割が教員です。

活動コンセプトは、「子どもたちが『裸足』ではいれる水辺環境づくり」をスローガンに「いつも身近な水辺に目を向ける運動」を展開してきました。

1993年（平成5年）に自然学習副読本「生きている武庫川（魚類編）」をはじめ出版し、流域の小・中学校に配布して、子どもたちに武庫川を母なる川としている生物たちのたくましく生きる姿をおして、川を愛し、自然を慈しむ心とそこに生きる生き物への理解を求めました。この本は自然学習副読本として好評で、1996年（平成8年）に「生きている武庫川（総集編・資料編）」を再出版しました。



図4 中流なのに上流のような武庫川

その後、1999年（平成11年）には、同じ阪神間を流れる川、猪名川を「人・くらし・自然」をテーマに「生きている猪名川」を出版しました。猪名川の上流部には日本一の里山「黒川」地区があります。オオクワガタをはじめ、多くの生物種があり、日本一生物の多様性を守っている地域です。また、千利休が茶の湯につかった炭の伝統をまもり続けられています。このような流域のまちやそこで暮らす多くの人々にとって、くらしを支え、潤いと憩いを与えてくれるかけがいのない財産である猪名川を、確実に次の世代に受け継がれることを期待してまとめま



図3 猪名川上流部の黒川地区の日本一の里山、手前にあるのは台場クヌギ（炭焼き用の木を切った後クヌギの台木、再生して7年後に炭の原料となる）

した。

「人・暮らし・自然」というテーマは、その後の河川調査の基本になりました。

猪名川は1996年（平成8年）には全国一級河川の水質現況（国土交通省）のワースト5の中に入っています。ところが、実際に調査活動が続けていくなかで、多くの生物が豊かに生息する環境であることがわかってきました。ワーストの河川の実態を調べようというのが次の調査活動になりました。

1975年（昭和50年）から1993年（平成5年）までワーストにあがっていた兵庫県の揖保川を、1999年（平



図4 揖保川 中流の様子

成11年）から行いました。春4月には源流（氷ノ山）から河口（姫路市網干）までを調査しました。まだ雪の残っている源流部から菜の花が土手を覆う下流部にかけての調査は、揖保川の雄大さを実感しました。「生きている揖保川」を2001年（平成13年）に出版しました。

毎年ワースト5に名前を連ねるのが「大和川」です。必ず大和川が出ます。いったいどんな河なのか、調べてみたい。それで、揖保川の次に大和川の調査をすることになりました。今回はじめて兵庫県以外の河川の調査をすることになりました。

どの河川の調査も同じですが、私たちの調査の最初はまず源流を押さえることです。大和川の源流は、盆地のなかの田んぼの中にありました。2002年（平成14年）より調査を初めて、日本の歴史を作ってきた河川を踏破し、「生きている大和川」として2005年（平成17年）に出版しました。



図5 大和川源流 一滴が集まって小さなたまりとなっていました。

ワースト河川の東の雄「鶴見川」はゴマフアザラシ「タマちゃん」が遡上した川で、なぜタマちゃんが遡上したのか興味は、ついに関東平野を流れる鶴見川の調査を行うことになりました。2007年（平成19年）より調査を開始しました。

鶴見川は、これまでの河川と違うところは、流域の水は必ず飲料水として利用されているのですが、初めて利用されていない河川だということです。

また、これまでのようにあまりにも遠いので毎週調査に行くということができません。関東に新たに協力者、団体と連携して、調査を行うというこれまでにない方法でデータを蓄積していきました。



図6 鶴見川源流 湧水が源流の水となる



しかし、結果はこれまでのワースト河川と同じように流域には多くの自然が残り、多くの生き物が生活していることがわかりました。こうして調査結果は2011年（平成23年）に「生きている鶴見川」として出版し、流域の小中学校へ寄贈しました。

そして、今淀川の調査をしています。近畿の大動脈である淀川の調査によって、いつも身近な水辺に目を向ける事につながる副読本を目指します。今までに各流域の小中学校に3万5千冊寄贈配布してきました。